【 25 】

氏　　名　原田直枝（はらだなおえ）
学位の種類　博　士（文　学）
学位記番号　文博第111号
学位授与の日付　平成10年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　文学研究科中国語学中国文学専攻
学位論文題目　北周庾信に於ける魏晋南北朝文学の集成と変換の検討
——“個”の表現をめぐって——

論文調査委員　（主査）教授 興膳　宏　教授 川合康三　助教授 平田昌司

論文内容の要旨

本論文は，文学作品とその作者について，既製の作者像や評価にとらわれず，徹底した作品そのものの分析に即して，その文学上に於ける位置を再考し，かつ，その作業を通じて，前後の文学史を眺望することをめざす立場から，北周（556～581）の庾信（513～581）とその作品について検討を試みたものである。

従来の庾信に関する見方は概ね，亡国の体験を経て望郷の心境をうたうことに優れた詩人，というものが主であった。しかし，現存する庾信の詩文の内容・文体は多様で，望郷や羈旅以外についての内容も多く，それらを含め詩文の作者としての庾信の位置は，従来のイメージからだけでは到底説明しきれるものではない。むしろ，庾信の詩文について第一に注目すべきことは，魏晋南北朝から隋唐への過渡期に於いて，先立つ魏晋南北朝文学のさまざまな流れを汲み，諸要素を集大成し，引き継ぎ，しかも，単に集大成のみならず，集成した諸要素に対して独自の変換も認められる，という点に在る。実にこうした点に拠ってこそ，文学史上に銘記されるべき詩人なのである。本論は，以上を論証することを主旨とする。

ところで，本論の副題でもある「“個”の表現」。これについては，序章に於いて，本論の主旨・方法併せて述べたが，このテーマは，決して詩文の主題としての“個”に限定されるものではなく，文を表現する行為に必然的に反映する作者自身の“個”，或いは，作者が他なる“個”として捉えた認識に基づくその表現，などをも意味する。個々の作品の構造を分けて論じることのできないものである。中国文学史の中で魏晋南北朝期は，この命題を意識して検討するに足る詩文が多数見出されるようになる最初の重要な時期に当たるが，その最末期に現われた庾信の詩文の中に“個”の表現の在りかたを探ることは，そこに至るまでの魏晋南北朝期に於ける“個”の表現の特性と展開を遡り見る有効な糸ぐちとなし得ることが予測される。実際，本論で扱った諸作品には，文学作品に於ける“個”の表現の，さまざまな在り方が窺われた。予め，各章で如何なる“個”の表現に着目するかを約言すれば，第一章は，「哀江南賦」に即して，庾信自身の“個”の表現の形態に，第二章に於いては，碑伝文の検討によって，「哀江南賦」とは対極に位置するとも言える，描写対象の“個”＝他者の“個”に即した表現の特長に，さらに第三章に於いては，作品を示し合い，詩の場を共有する相手を持つことが明らかな唱和詩を採り上げ，贈る相手と作者との関係が作品に於ける「場」の共有の在り方に如何に反映するか，そこに反映される“個”に，それぞれ焦点を当てる。

以上，約三方面に亘る問題意識に従って行う各章ごとの検討の要旨を，以下にやや詳しく述べたい。

第一章　「「哀江南賦」論——鋪陳に於ける時間——」は，ボリュームに於いても，従来の注目のされ方に於いても，庾信の代表作と言ってよい「哀江南賦」について，この一大長編を支える構造を明らかにすることをめざしたものである。その検討に伴う具体的な関心は，次の約三方面に亘る。第一に，辞賦文学史の立場から，辞賦を特長づける叙述形式である“鋪陳”の在りかたの分析を行うこと。第二に，文学作品の主題の継承展開を追う立場から，それ以前の魏晋南北朝期文学に於いてしばしば生み出された国家興亡を主題とするさまざまな詩文の流れの中での位置づけを行うこと。さらにまた，庾信という一個の作者をめぐる関心として，彼の作品の中でも屈指の自叙的傾向を指摘される作品であることに着目し，作者自身

の“個”が文学作品に於いて如何に表され得るかについて考察すること。

さて，この賦の鋪陳の展開に於いて最も注目すべき機能を果たすのは，「時間」である。ここで言う「時間」とは，南朝の始まり頃から梁朝滅亡までの過程に沿う時間を意味する。「哀江南賦」は，この「時間」の中で生起した，梁朝社会の情況（公）と庾信自身の身辺事情（私）とを，順を追いつつほぼ交互に織り交ぜながら述べていく形となっている。そして，それらの事柄を表す語彙・字句の類には，「哀江南賦」以前のさまざまな詩文を経て，国家興亡とその悲哀に係わるニュアンスの定着したものが，豊富に取り込まれていて，さながら魏晋南北朝文学に於ける興亡にまつわる要素の集成の観を呈する。これら各種のモティーフが「時間」の進行に応じて配され，連結されていく語りの中に，失われた江南興亡の「時間」が再現される仕組みとなっている。常に「時間」が叙述の鍵となっているのである。

ところで，こうした一王朝の経緯を叙述する文の型に於いて，三国呉の滅亡を体験した陸機「弁亡論」と，「哀江南賦」との間には極めて相似する点が認められる。魏晋南北朝の文学史に於いて，作品中の装置として「時間」が機能するような伝統は，歴史記述が少なくとも「弁亡論」を含む一王朝の興亡の経緯をテーマとして論ずる“興亡史論”の域に属するものであるが，こうした「弁亡論」その他の“興亡史論”の叙述の形と，「哀江南賦」との間の相似は，辞賦と論という表面的な文体の別を越えて，時間軸に沿った「鋪陳」の一形式としての共通性によるものと理解し得る。ここに，魏晋南北朝の中に“興亡文学”とでも呼ぶべき詩文の系譜を辿ることができ，「哀江南賦」はその集大成として位置づけ得ることになるのである。このように「哀江南賦」に於いて，叙述の装置として作品の中で具体的に機能する「時間」とそれを語る作者，という形で庾信の“個”の表現を把握する作業を通して見直されたり見えたりしてくる，魏晋南北朝期の詩文の流れは幅広い。

第一章に於いて検討した庾信自身の“個”の表現に対比して，他者の“個”の表現の構造を見るべき有力な材料であり，また庾信の集中大きな割合を占める文の一群であるのが，約31篇にのぼる碑伝文である。第二章「庾信の碑伝文」では，これを取り上げた。ここで言う「碑伝文」とは，墓碑文，誄，哀，墓誌文，など故人について賛辞を述べた記録するあらゆる文体，を指す。庾信の碑伝文は，六朝期の他の文人の多くの作品同様，ほぼ駢麗体で書かれている。よって本章の考察は，それらについて，駢文による碑伝文としてのさまざまな特長・傾向を把握し，駢文史を眺望するとともに，碑伝文と言えば直ちに想起される中唐以後の古文による碑伝文学に対して比較考察の資ともなそう，という目的も兼ねる。

庾信の碑伝文の表現上の最大の特長は，対句と散句とを組み合わせた用法＝“駢散兼行”に在る。各碑伝文の，叙述対象の人物の経歴を述べる部分に於いても，また，最も称賛的な部分に於いても，いずれも，庾信の碑伝文はしばしば散句を対句の前か後ろかに配しており，そのような構成によって，韻律上の破調が生まれる構造となっている。こうした“駢散兼行”の方法は，彼以前の六朝期の他の碑伝文にはほぼ見当たらないもので，庾信の駢文とそれらとを画する大きなポイントと言える。

さらに注目すべきことに，庾信自身の約31篇にのぼる碑伝文のうちでも少数の，「呉明徹墓誌銘」「柳遐墓誌銘」など，庾信と共通する何らかの経歴を背景に持つ人物（より明確に南朝系の人物，と限定してもよい）についての碑伝文と，その他多くの，北周の身分高い人々の要請に応えて書かれた碑伝文との間に認められる差異もまた，この対句の用い方に於いて顕著なものである。すなわち，前者の碑伝文に於いては，庾信の特長をなす対句を交えた形式＝“駢散兼行”が豊富に用いられ，メリハリの効いた文となっているのに対し，後者の碑伝文に於いては，確かに“駢散兼行”の形式が交えられているものの，用いられている箇所が少なく，生前の官職の列挙などに費やされた，よりボリュームの大きな部分にそれが紛れる形となって，せっかくの対句の生む効果が減殺される結果になっている。無論，両者の叙述の違いは内容面でも，重点の置かれる事項が異なるなどの点で認められる。つまり，前者が，故人の個別的な事蹟の叙述に多くの字句を割くのに対し，後者は，やや単調な官職の経歴や，非常に類型的な人柄の叙述に中心が在る，というように。両者についての叙述の差異は，明らかである。このように叙述の対象が北朝系か南朝系かに即して，相違を一目で判別させ得る字句の面ばかりでなく，上述のごとく，個々の表現の構造にまで及んで異なっていることは，叙述対象と庾信自身との関係に応じて，個々の表現が分別されている，ということ，すなわち，作者に於ける他者の“個”についての意識の違いが，そのまま表現の違いとして表われている，ということである。これを本論では，庾信に於ける，他者についての“個”の表現の在りかたの一つ，と捉える。

第三章「従軍をめぐる詩について」は，従軍の場をめぐる唱和の詩四篇をもとに，これを魏晋南北朝期の従軍詩の流れの中で捉えるのはもとより，これを手がかりとして庾信周辺の北朝文学探索への視座をひらくことを試みたものである。結

果，相手のいる詩の場合，相手と庾信自身との関係が，詩の内容ばかりでなく，詩の表現やスタイルにまで反映していることが以下のごとく検証される。

従軍をめぐる唱和の詩四篇の相手は，庾信の詩文の贈呈の相手として頻繁にその名が見出され，庾信との交流がよく知られる趙王（２篇）と，少なくとも庾信の集の中で当該の詩以外にその人物の名が見られない盧愷・若干鳳（各１篇）。３人とも北朝系の人物であるが，前者に対すると後者に対するとでは，詩の構造及びそこから見えてくる詩の源流が，明らかに異なる。

まず，盧愷・若干鳳を相手とする詩では，語彙の用いかた配しかた，どれをとっても南北朝を通じて散見する武功称賛的要素の濃い従軍詩に類する型が認められる。しかし，南朝系の従軍詩が，楽府「従軍行」の行役の辛苦とそれにまつわる悲哀をモチーフとした，物語的性質を帯びた類型か，或いは，武功称賛をしながら軍事とはかけ離れた繊細華麗な修辞をさしはさむ型を主とするものであるのと比べ，庾信の場合は，従軍の悲哀の要素も軍事と無縁の修辞も希薄で，単に武功称賛の要素で固めた作品となっており，それはむしろ北朝系の従軍詩に近似するものであることが目を引く。また，両篇ともに，詩の唱和相手である盧氏・若干氏その人に関する庾信の感慨や共感めいた表現は，見出されない。

一方，趙王を相手とする２篇のほうは，古詩十九首などにも通じる，行役にまつわる悲哀のモチーフが積極的に用いられ，武功の称賛よりは，軍旅の辺境感や羈旅感に結び付く表現になっている。こうした情感が認められる点が，盧・若干両氏への詩と違うのは無論だが，しかしまた，前述の南朝末従軍詩の二つの傾向のいずれとも重ならず，過度な修辞が抑えられているぶん，軍旅に即した表現となっている。その一因として，これが北朝の場に於いて作られたものである，という事情に，本論は言及した。すなわち，庾信の従軍をめぐる詩の，南朝系統の要素の変換の底にはいずれも，北朝側との接触の反映のようなものを考慮に入れるべき示唆が潜むのである。なお，倪璠注が，趙王を相手とする詩を，趙王個人に対する庾信の側からの「別離の情」が表われたもの，と説くのも，相手が盧氏・若干氏か趙王かで，それぞれに対する庾信自身の心的距離とでもいうべきものが，個々の篇に反映しているであろう可能性を補うものである。公式の制約の伴う従軍という場に拠りながら，このような別が見出されることもまた，庾信に於ける一種の“個”の表現の一環として把握できる。

論文審査の結果の要旨

北周の詩人庾信（513～581）は，その前半生を南朝梁の宮廷詩人として送り，華麗な詩風を称されたが，故国の滅亡に際会して，後半生は心ならずもかつての敵国であった北朝の周に仕えるという数奇な運命を経験した。彼はもはや帰ることのかなわぬ南方への思いを切々と綴った「望郷の詩人」として，中国の詩史にその名を遺すこととなった。しかし，論者は本論文において，そうした既成概念をつとめて排しながら，詩以外にも多彩なジャンルを有する庾信の文学の世界を全面的に再検討することを通じて，新しい庾信像とその文学史における位置づけを模索しようと試みている。また副題に「“個”の表現をめぐって」というように，さまざまな次元における人間の個性を描き分けることに庾信がいかに工夫を凝らしているかについて，詳密な分析を行っている。

三章によって構成される本論文の第一章は，庾信の代表作として著名な「哀江南賦」のために充てられる。「哀江南賦」は，約三千四百字から成る叙事的な韻文の大作で，梁の滅亡とその激浪に翻弄されつつ生きた作者自身の多難な歩みを描き出している。論者はこの長大な作品の中に，異なった二種の時間の機能が作用していることに着目する。第一の時間が時代社会のうねりを巨視的にたどったものである一方，第二の時間は作者自身の行動をそうした大状況の中で跡づけたもので，第一の時間の中に隠微な形で挿入されている。論者によれば，このいわば「公」と「私」の時間を組み合わせ交錯させることによって，この賦の表現効果は成功を収めている。この手法は，庾信に先立つこと二百五十年前の文人陸機の「弁亡論」に通ずるものがある，と論者は考える。陸機は三国呉の貴族の出で，呉が滅びたのちかつての敵国晋に仕えたという点で，庾信に近似する経歴を持つ。その「弁亡論」は祖国の興亡の経緯を陸家の歴史とからめながら分析する論文であるが，冷徹な史論の形を装いながら，そこには「公」と「私」の二つの旋律が協和しあって亡国の悲哀を奏でている。難解な美文の修辞に覆われた「哀江南賦」に，いわば「弁亡論」のエコーを聞き取ることによって，この作品の理解に新しい視点を導入したものとして評価することができる。

第二章は，庾信の碑伝文を対象としている。碑伝文とは，神道碑，墓誌銘など，死者の生前の行跡を哀悼の意を込めて叙

述する文体である。庾信の文集には，三十一編に上る碑伝文が収録されており，彼の作品中に大きな割合を占める。これらの作品は，すべてが北周の王族や貴顕の士のために書かれたもので，同時代の他の文人の碑伝文と同様に，対句を積み重ね典故を駆使した荘重な駢文のスタイルが用いられており，その過剰な修辞性ゆえに，人間の個性を描くべき文学作品としては不十分なものとして，従来の庾信研究においてはほとんど顧みられることなく放置されてきた。論者は，この未開拓の領域にあえて挑戦し，形式美に包まれた文体の中で，庾信がいかに人間の個性を描き分けることに苦心したかを追跡している。

論者は，庾信の碑伝文を逐一丹念に検討した結果，いくつかの興味ある現象がうかがえることを発見した。鮮卑系の王族や高官などで，作者と生前ほとんど交渉のなかった人物を対象とする場合は，類型的な故事や成句などが頻用される傾向があり，異なった人物の碑伝文相互の間にほとんど同じ叙述が見られることさえ珍しくない。それに対して，南朝出身者を対象とする作品にあっては，それぞれの個別的な事情をできるだけ具体的に描き出そうとする工夫が見られる。そこには自分と同様の経歴を持つ人物に対する一種の自己移入が感じられる。その際，対句の中に散句（非対句）をまじえる「駢散兼行」のスタイルが有効に用いられて，事跡の記録とそれに対する筆者の思いがメリハリの効いた文章となって表出されていることを指摘している。論者はさらに，こうした散句を生かした文体の創出が，駢文の伝統を継承しつつその表現法を発展させたものであることを，『文心雕龍』や『文鏡秘府論』など修辞学の理論を援用しながら論証している。ともすれば類型的な表現のみに目を奪われる駢文の文体に，類型性を超えた個性追求の可能性が潜んでいることを考察した成果として注目に値する。ただ，論理展開の方法にはいささか生硬なところがあり，必ずしも全面的に論者の主張が読者に伝わらない箇所がまま見られるのは残念である。

第三章は，庾信の詩に唱和の作が少なくないことに着目して，北遷後の庾信が南朝とは異質の文学環境の中で，いかに独自の詩風を形成していったかを考察しようとしている。その当面の手がかりとして，「従軍」を題材とする唱和詩を取り上げ，これらの作品に描かれる「従軍」のありさまが，魏晋以来の伝統的な従軍詩とは異質の側面を持つことを指摘する。ただ，これは庾信の数多い詩作のごく一部について問題を提起したにとどまっており，今後のさらなる探求によって深めるべき課題であろう。賦・文に関する考察と併せて，総合的に庾信の文学を解明するためには，詩の分野についてのより緻密な読解が望まれる。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1998年３月５日，調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について試問を行った結果，合格と認めた。